

さよならの言葉は
京都から

京町萌香

Yomachi Moeka

青山ライフ出版

CONTENTS

●	さよならの言葉は京都から	4
●	冬色のファンタジー	24
●	あの頃の夏にもどって	40
●	西洋館に住む少女	52
●	ふき子の普通の日常	70
●	真夜中の電話	92
●	おにぎりとクリームパンと	112

さよならの言葉は京都から

さよならの言葉は京都から



美咲はタクシーを拾い京都駅へ向かった。

確か洋介は朝10時すぎの東京行きの新幹線に乗ると昨日別れ際に言っていた。だから30分前頃に京都駅へ着いていれば洋介に会えるかもしれない。

いつもは改札口で東京へ帰る洋介を見送っていたのだった。でも今日は違った思いが

美咲の胸の内にあった。少しずつ心の中で何かが変わっていった。それを言葉にするのにはあまりにもつらいものがあつた。そしてこの恋が潮時だということを感じていた。もう一度だけ彼を最後に送りたいという思いが美咲の心の中にあつた。

東京方面に向かう上りの階段は人で混雑し始めていた。あまり普段は利用しない上りのホーム。少し上りきつてから、この階段はもしかしてホームの前方にあるのではないかという事に気付いた。でもそのまま上りきつた。なんだか息がきれそうな思いだつた。なぜ自分はこうしてホームで最後を見送ろうとしたのか、その気持ちを分析するほど気持ちの余裕はなかつた。ただ洋介の姿を見ておきたかつたのかもしれない。

なぜならもう本当に会わないかもしれないから。

ふと目の前を和服姿の若い女性を通りすぎるのを見た。慣れた着物の着こなしから祇園あたりの芸妓ではないかと思われた。花街で会えばそれほどめずらしくないかもしれないが、ホームでは一瞬その存在に誰もが目を奪われるほどの美しい人だつた。

かつて自分も若い頃、着物姿を賞賛してくれる旦那衆の声を耳にしたものだつた。そんな頃があつたなと美咲はその女性を見て感じるのだった。

その女性はずでにホームの前方にいた男の元へ足早に向かつていた。そして互いに手

を取り合いじつと見つめあう二人の姿を美咲は目で追った。何も語っている様子ではなかった。やさしいまなざしの男の視線は、彼女のすべてをやさしく包んでいるようにさえ見えた。

数分で列車が到着するアナウンスが入った。すると彼女はすつと男の首に両手を回して自分の方に引き寄せたかのように見えた。そしてその瞬間、自分の頬を男の頬にさつと摺り寄せ耳元で何かささやいたようだった。

「さよならまた会える日まで……大好きだから……ね！」

とまるで彼女がささやいたように美咲には聞こえた。きつとそういう意味のことを言ったに違いない。女の方からそれほどの思いを言っただろう気持ちだが、美咲には痛いほどわかった。

自分だっただらなんて洋介に言っただろうか。女のほうから思いを告げられる時こそ、確実に恋している女の姿がそこにあるのだ。そんな飾らない気持ちに満ちあふれていた若い頃の記憶と、目のまえの二人の仕草とが痛いほど重なった。そして確実に月日が流れてきたということの現実を、祇園囃子の音に入り混じって頭の中でそれが渦巻いたのを感じたのだった。もうあの頃の自分には戻れないどうしようもない位の切ない気持ち

が胸の奥から湧き上がった。口の中がからからに乾いたように感じになった。そんな目の前の男女の別れの姿を見た美咲は、心が揺れ動くのを隠せなかった。

そして新幹線に乗った男を見届け、その女性は自分の目の前を通り過ぎて行った。その一瞬、女性の美しい瞳が涙で溢れていたのをそのとき美咲は見たのだった。女性の思いがそのまま美咲の心に繋がった瞬間だった。

その時発車のアナウンスを聞いて我にかえった。少し前に発車したホームの反対側からすでに列車が出ようとしていた。

美咲はホームを見渡した。短い時間の間にホームで待つ人の流れが変わり、待つ人々の間を目で追った。

もしかして……人が列車に乗り込んだ後のホームに洋介の姿を見つけることはできなかった。

美咲はこの列車に洋介が乗っていると思った瞬間、列車は静かにすべるようにホームから離れようとしていた。何両目だろうか、その窓際に座る洋介と目が合ったのは。彼も驚いたようにこちらを見ていた。あまりの一瞬の出来事で美咲は声もでなかった。洋

介は何か言いたかったようにも見えた。

これが別れなら、あまりにも人生で短く悲しい別れだった。自分は何か洋介に告げるためにホームに来たのだから。いつもなら改札口で見送るのに、ホームにいる美咲の姿に彼も驚いたに違いない。でもきつと利口な人だから、なぜ美咲がこのホームまで来たのか判ったはずだ。今頃きつと新幹線の中で、美咲の胸の内をすべてわかっているかもしれない。そしてなぜ美咲がホームまで見送りに来たのかを。

美咲は言葉で最後の別れなんて言えないと思った。これでいいのかもしれない。最後に窓際に座る洋介の姿を忘れることはないだろう。いい男だった。心の底から愛していたたつたひとりの男の存在だった。美咲には充分すぎるくらい気の利く魅力ある男だった。

これで「さよなら」だと美咲は自分に言い聞かせ一人ホームの階段を下った。京都の街はもうしばらくすると始まる祇園祭の準備で気ぜわしくなっていくだろう。

美咲の経営する店は、祇園の北側花見小路を少し入った新門前通りにある。このあたりは比較的静かな通りで、昔から古美術や骨董の店が軒を連ねる風情ある通りだった。

カウンターには8席の椅子が並び、テーブル席は2卓というかなりこじんまりとした店だった。入口を入るとまず洒落た盛り鉢や色合いの綺麗な皿が飾られているのを目にする。外を歩いていてもそれが目に入るので、ここは食事処ではなく骨董品を売っている店かと思ってしまう。店内には美咲が自ら集めた伊万里の皿などが小奇麗に並べられていた。まずそういつた皿などに興味を持つ観光客と思われる人たちが最近は多くなってきた。最近は何世の中に情報があふれているので、東京からでもこういった物を求めてこの辺りに来るのだろう。まさに寺社見学のついでに、京都ならではの骨董を買い求めていくのだろうか。

そのついでに気軽に食を楽しんでもらえたらというのが美咲の望んでいるところだった。昼のランチはかなりリーズナブルな値段になっているので、女性の一人客も最近は多くなってきた。おそらくリピーターも多いようだ。

京料理だけではなく、ワインも気軽に飲めて和洋の食材を自在に用いて、コース料理にとらわれない新しい中国料理をだす、いわばヌーベルシノワを目指していた。

料理のシェフは東京の中国料理の名店で腕を磨いた人材を雇った。美咲は和服を着こなし、骨董品の店の販売と応対に精をだす日々だった。かつてその接客振りを持ち前の

美人女将との評判も加わって、東京の有名な出版社が毎月発行している、30〜40代を対象にしているファッション雑誌の「京都の粋で美人女将の特集」に載ったこともあった。

洋介がふらつと美咲の店に来たのは12月の師走に入った初旬の頃だったと思う。もう5〜6年前になるだろうか。その日は朝から気温が12月としては低い底冷えのする日だったのを美咲は今でもよく覚えていてる。寒かったせいか客足も悪かった。

入口付近で興味深く骨董品の皿などを見ていたのが洋介との出会いの最初だった。それから起こることなど誰が予想していただろうか。

「どうぞお入りになつて中もご覧下さい？ お好きでらっしゃいますか？ こういった器や皿などは」

「あ、はい。じゃ失礼して少し見せて下さい。

奥は素敵な食事処になつていますね。外からは気がつきませんでした」

「お気軽にどうぞ。外は寒いですから何か暖かい食事でもいかがですか？

東京方面からですかしら、すぐわかりますわ。

最近では地元の人より遠方からのお客様のほうが多くいらつしやるんですよ。

雑誌で京都の特集を組んだりインターネットの情報も豊富ですから、もうこちらがび